

(社) JC 総研 基礎研究部 客員研究員 和泉真理

第18回 JC 総研欧州研修報告その2： 英国の大規模有機農場

今回の視察では、英国とベルギーで農場を訪れた。まずは、英国で訪れた有機農産物の生産から加工、レストランまで営む大規模農場、デイルズフォード農場を紹介しよう。

1 コッツウォルド地方の素敵な農場

英国コッツウォルド地方は、ロンドンから西に車で1～2時間の所に広がる丘陵地帯であり、「イングランドの心の拠り所」とも呼ばれる美しい田園風景と点在する石造りの町や村は観光客に人気のエリアである。この風向明媚な景色の中に広がるデイルズフォード農場は、この地の900haの農場と、ここから北方160kmの1,200haの別の農場全てで有機農業を営み、穀物、畜産物（肉、卵、酪農品）、野菜を生産している。農場にあるおしゃれなショップとレストランでは、農場からとれる農産物で作られた加工品や料理を楽しむことができる。生産物は、この農場での販売の他、ロンドンにある2つのショップ、レストランへの直接販売、通信販売など、自らのルートで全て販売している。



コッツウォルド地方は、今や英国の資産家達が好んで住む地域でもある。農場のショップで売られている加工品もレストランもそれなりの値段がするが、昼時ともなれば、いかにもリッチな出で立ちの夫婦



1900年代の農家の建物を改築したショップ。



や友人グループがレストランを埋め、不味いと定評のあるイギリス料理とはかけ離れた、美味しくて生野菜がふんだんに使われたランチを楽しんでいる。広々とした農場の散策路をたどり、牛の放牧地や野菜の生産エリアなどを観て楽しむこともできる。

この農場のオーナーは、工作機械の大手メーカーである JC バンフォード社の大株主であるバンフォード卿である。農場の管理自体は、オーナーの意を受けた生産担当マネジャーと販売担当マネジャーが行う。英国では、貴族、大学、裕福な実業家といった地主が農場マネジャーを雇って農業経営を行う例はよくみられる。マネジャーは給与を払われ、地主の意図に沿った経営を託される。

私達を案内してくれた生産担当のマネジャーのリチャード氏は、6年前にデイルズフォード農場のマネジャーとなった。その前はオックスフォード大学の持つ農場のマネジャーだったそうだ。リチャード氏は、バンフォード卿が思い描いていた農場の姿を具体化し、採算の十分にとれる大規模有機農場を作り上げてきた。

2 デイルズフォード農場の経営

私達は、トラクター（もちろん JC バンフォード社製）が引く農場視察用のトレーラーに乗り込み、リチャード氏の説明を受けつつ農場を回った。

デイルズフォード農場では2カ所合わせて2100haの農場全てで有機生産が行われている。経営作目は農場別に以下のようにになっている：

コッツウォルドの農場 (900ha)

乳牛（フリージアン）130頭、肉牛（アンガス）150頭、親羊1,250頭
クリスマス用七面鳥3,000羽、ガチョウ300羽、採卵鶏1,400羽
野菜類 8ha

北方のスタッフォード州にある農場 (1,200ha)

肉牛（アンガス）300頭、親羊3,000頭、食用シカ350頭、
鶏（肉用）1,500羽

また、2農場合わせて160haを使って食用と飼料用の穀物を生産している。農業生産に携わるのは、コッツウォルドの農場が8人と、別途手間のかかる野菜部門に5人、北方の農場が10人であり、野菜の作業がピークとなる夏にはパートも雇うそうだ。

この農場では、肉、牛乳、卵を作るために必要な餌やエネルギーを自給している。家畜の糞尿は穀物生産に還元される。

農場のセクションごとに見ていこう。

穀物畑

赤クローバー3年→冬小麦→穀物→大豆などの豆類→白クローバーという7年間のローテーションを組んでいる。赤クローバーはサイレージにする。リチャード氏はローテーションの重要性を強調していた。雑草コントロールをし、アザミが少ないなど、作業効率を高める工夫もしている。



乳牛の放牧地

リチャード氏によれば、近代的な酪農経営では、乳牛は年間10,000～12,000リットルの生乳を産出するが、平均2.7回の分娩回数で死んでしまう。しかし、

この農場では、平均の乳量は7,000リットルだが、分娩回数は6回であり、収益性は高いという。乳牛としてはフリージアンその他、珍しいグロースター牛も飼っており、グロースター牛の牛乳だけで作ったチェダーチーズを作って販売している。

肉用牛の放牧地

農場ではアバディーン・アンガスという肉牛を牧草だけで育て、穀物などは投与していない。アバディーン・アンガスは、牧草だけで育てても良い肉質を得やすいという特徴を持つそうだ。400頭のうち、100頭は血統書つきである。肉牛は血統や予想される肉量など関連する成績がすべてコンピュータでデータ化されている。



採卵鶏

良質な採卵鶏として知られる地鶏から、毎日1,100個の卵が生産され、2人の従業員が手で集めている。150羽ずつ月齢の異なる鶏を1つの小屋に入れる事で、卵を均等に産ませるようにしている。手作業は大変だが、ここの卵はそれだけの価値を産むそうだ。

キツネがいるので、夜はすべて小屋に入れて戸を閉める。小屋と鶏の運動場は3〜4ヶ月ごとに移動させることで、病気を防ぎ、新鮮な草を与え、鶏を健全な状態に維持できる。鶏糞が堆積したあとは野菜畑として使う。

野菜畑

約 8ha の野菜畑では、80 種の野菜・果物を生産している。ビニールハウスではサラダ用の葉物類を年中供給している。葉物類は収益性が高いし、この野菜エリアがあることで、ショップやレストランに季節感のある食材を提供し、訪問者に畑を見せるというデモンストレーション効果もある。



雑草の駆除は、耕転、手作業での除草、土壌の焼き払いを行っている。害虫については、畝毎の作物の組み合わせなどで対応しておりあまり問題はないが、新芽を荒らすカラスなどの鳥害が問題だそうで、ビニールで覆うなどして防いでいる。

3 ビジネスとして成功する有機農業とは

デイルズフォード農場は、慣行農法の農場よりも高い収益をあげている。これについて、リチャード氏は、「一般の農業者は有機に取り組むことに恐怖心があるようだ。例えば、家畜を良い状態で飼うことよりも、抗生物質を使ってしまう。抗生物質を3回使うよりは、我々のやり方による収益性の方が高い。」という。また、リチャード氏は、有機農業経営を成功させる秘訣は、上質のものの作り、自分で売ることだという。生産物を市場に出すのでは、中間業者に利益のほとんどを持っていかれてしまう。デイルズフォード農場は規模が大きいですが、小規模の有機農家が地元向けに生産する方法でも経営は十分に成り立つとリチャード氏は強調する。成功のポイントは、シーズン中安定して供給することと、十分な品質水準を保持すること、そして生産の姿を見せることによって客を惹き付けることである。

しかし、穀物畑のローテーションや家畜の飼養方法といった生産面での工夫や直接販売でのセンスの良さもさることながら、この農場の成功を支えているのは、英国で急速に伸びている有機農産物市場と人々の食への関心の高まりであろう。BSE の発生に端を発し、幾多の家畜疾病や食品事故の発生、最近では

穀物需給の逼迫に伴う食物価格の高騰もあり、英国の人々は食べ物がどこから来るか関心を持つようになっており、そのことが有機市場の急速な拡大につながっている。英国の有機製品の市場規模は、1995年の1.4億ポンドが、2010年には17.3億ポンドと10倍以上に拡大しており、英国の農用地に占める有機栽培面積の割合は4.2%を占める（日本は0.17%）。



トレーラーに乗ってリチャード氏の説明を聞きつつ農場を回った

デルズフォード農場はその時流に乗っており、生産が店の注文に応じきれない状態だそうだ。

その中で、リチャード氏は「消費者をどのように教育するか」が特に重要だと言う。たとえば、最近、英国の有名シェフがテレビでブロイラーはひどい方法で生産されていることを紹介したら、翌日からスーパーで鶏肉が一斉に売れなくなったそうだ。鶏肉はまた買われるようになったが、一部の消費者は良質

な鶏肉へと移行した。リチャード氏自身は、「2羽の安いニワトリを買うより、良いニワトリを1羽買って、全部を3日かけて食べた方が良い」「高い食材を使ったからといって、必ずしも食費が上がるわけではない」と消費者に説く。自らの有機農産物生産の取組を多くの人に見せることで、有機農業を評価してもらい、さらに普及しようとしている。「自分はこの仕事に情熱を持って取り組んでいる」とリチャード氏は彼の説明を力強く締めくくった。